

拾遺和齋集

三

特別
イ 4
3163
3(2)



貴
14
3163
3(2)

乃記
部
備



松道和歌集卷第一

春

年ささくふんの家并合ふよふんゆかり

平家兼光

春ささくふんの家并合ふよふんゆかり

義平四年年中より美しゆかりの屏風

紀文麟

春ささくふんの家并合ふよふんゆかり

山越若人

昨日を年小書りて春ささくふんの家并合ふよふんゆかり

冷泉院東より書りてはさるる時并合ふよふんゆかり

少川書りてはさるる時并合ふよふんゆかり

源重之

吉野山峯此より雪の清くは約公家此より雪の清く

延喜寺時月次正屏風

嘉祥法師

何れに年小書りてはさるる時并合ふよふんゆかり

源順

氷をよまのぬきぬき首風よまの打をけぬき此雪

平祐舉

春ささくふんの家并合ふよふんゆかり

み川祿

春ささくふんの家并合ふよふんゆかり

題一ら次

よみ人志ら

我が朝の梅はなほひてふ吉野の宮雪とて花とて雪
天曆十一年三月廿九日内裏御合り

中納言朝忠中誓

雪はあふりせし雪溜ぬ山雪いとまよとまよ
うくひまを紙のよき侍とまよ

大伴家持

打散し雪は溜りまよまよたにまよたにまよまよ
題一ら次

柿本人丸

梅の花をねもみしははるかに梅は雪は雪は
追喜清時直白そまよまよ平の中う

つとむ

梅は枝よ溜りし雪を白書はたのめまよまよ
因清時屏風よ

み川村

雪よ冬まよひぬ梅はかまよまよまよ
冷白院清時屏風のよ

平意盛

我が朝の梅は枝よまよひぬ梅はかまよまよ
新院清時屏風よ

まの祿

雪よ冬まよひぬ梅はかまよまよまよ
まよまよまよまよまよ

はるゆきのまよ

白梅は枝よ梅の花よまよまよまよ
影一ら次

人丸

あまのつらさを梅屋にわすれぬ 梅屋のつらさを
恒作右大臣の家の屏風より

費三

野道とわすれぬ梅屋より下へ梅屋のつらさを
つらさを梅屋より

園融院清浄

春日のつらさを梅屋より梅屋のつらさを
大伴家持

影一ら次

美作のつらさを梅屋より梅屋のつらさを
お月さまのつらさを梅屋より梅屋のつらさを

影一ら次

美作のつらさを梅屋より梅屋のつらさを
つらさを梅屋より梅屋のつらさを

梅のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

松のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

影一ら次

梅のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

入道式丸のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

大伴良能宣

つらさを梅屋より梅屋のつらさを

延喜寺時宗屏風のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

はつらさを

梅屋のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

影一ら次

梅屋のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

梅屋のつらさを梅屋より梅屋のつらさを

散らるる花をみれば
影一ら花
よみ人志す事
梅より花はなほ
りしをけ

そよ人をわびし
園歌院清時三
平の盛

花のよを極
影一ら花
よみ人志す事

梅より花はなほ
持中納言義
竹々々々

影一ら花
よみ人志す事
梅より花はなほ
持中納言義
竹々々々

延喜寺時有靈の西席 奇合のうらり
 物とて我らと有る梅花散やとをいふれむ
 あれ是く人をゆるりさるる家小梅の雲乱
 てゆるりさるる 惠慈法師
 清才東好ふき宿梅花分やとくや風おちるん
 水のまのとき風集つるゆき
 長少くぬくこを梅花散事此れいふまゝ雲をさ
 孝子院奇合よ
 梅散事此れ梅花散といひてをいふれぬ雲をさる
 たいしに 後人奇合
 是實の山落まれば梅花散をいふれぬ雲をさる
 天曆清時奇合よ 小哉余ぬ

是門の山くれある梅花散のこまをとも風をさる
 影しり伏 小か人奇合
 是月まをいふ梅花散をいふれぬ雲をさる
 ころ曆出時奇合よ 源順
 善梅の山落まれば梅花散をいふれぬ雲をさる
 井ていふふふよ山落の花ありあつては
 ありさるる 惠慈法師
 山落の花散らりよあつては二の里人かぬぬま
 屏風より ともか人奇合
 物といふを梅花散をいふれぬ雲をさる
 影しり伏 小か人奇合
 是もさるるあり山落のありあつては
 天曆清時奇合よ

威明のみこ

花散らふ心物と名私らやまきと風とまらふ
百首奇中よ

友と社味かゝるくは春の花ねよしのとと思ひき
春融院清時山屏風奇

行きの界は春浪はる春の善れ積よ久らるるとし
平の縁あり

美の春咲雲は梢よふりの緑もこころをうるる
出喜清時苑喜舎よて春花集の傍をう時よ

為あく乱し咲る春の雲ひくまき久あわくし思
小野定太政大臣

野々歌

新恒

春とわれ情むらむ春の花をよ梅すて浪そかりき
平云賦

山里れ卯花よまよの子に侍るを
平云賦

卯花と散り梅よまよのわきよよまよまよ
卯花と散り梅よまよのわきよよまよまよ

卯花と散り梅よまよのわきよよまよまよ
卯花と散り梅よまよのわきよよまよまよ

卯花と散り梅よまよのわきよよまよまよ
卯花と散り梅よまよのわきよよまよまよ

赤まつう月も後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

はるのうら

山屋小あつう月も後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく
赤まつう月の後す卯辰白くまひのまはるるをあつうか
つう梅さく

たふ神の母いそきて都をたれきたるの枝よふく
 天曆清時以屏風よふく人のよふりまふ人
 うけふあり
 壬生もん見ん
 小野ま大臣家屏風よふくりまふあり
 都をたれきたるの枝よふく

ついで
 のこふもやの枝よふく都をたれきたるの枝よふく
 ころもふ家代舞合

みゆね

都をたれきたるの枝よふく

都

よふ人

都をたれきたるの枝よふく
 ありあふをゆきまの
 うそ人思はんゆきまの

大伴政士郎女

都をたれきたるの枝よふく

中務

都をたれきたるの枝よふく
 ありあふをゆきまの
 終る清時中又舞合

よふ人

都をたれきたるの枝よふく

拾遺集

伊勢

ついでに
歌一ら頌
いふ人あはれ

春さよふとあり川のさよふとあり
春さよふとあり川のさよふとあり
春さよふとあり川のさよふとあり

さよふとあり川のさよふとあり
さよふとあり川のさよふとあり
さよふとあり川のさよふとあり

さよふとあり川のさよふとあり
さよふとあり川のさよふとあり
さよふとあり川のさよふとあり

さよふとあり川のさよふとあり
さよふとあり川のさよふとあり
さよふとあり川のさよふとあり

拾遺集卷第三

秋

秋のさよふとあり川のさよふとあり

伊勢

秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり

秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり

秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり

秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり
秋のさよふとあり川のさよふとあり

名入律志まけつ春のさのさふふをなと秋空ふり

歌一らひ

安貴王

秋きてつともあはれこのねあつたまの風を秋ま

庭を清時山屏風より

み川原

まはれ北書はるまの秋風我さあやまをま

つゆき

秋風を秋まあつこの川をさう流のまらあを秋ま

歌あつらひ

柿本全まら

何見れ何をたさあわらぬまを君さあを年とをま

天河とあつらはるあつと流流あひまふあをま

よふ人志る流

さ秋まあめのかつと秋まあめさあめさあめさあめ

湯原王

ひこの思ふとらま事しつとみる我つらあめあけん

ひとまあ

あつあつと一果あまあひつと我ままらとあつあつ

庭を清時山屏風より

つゆき

秋まあめさあめつと秋まあつと秋まあつと秋まあつ

右末門曾源法隆家乃屏風より

ひとまあつと一果あまあひつと我ままらとあつあつ

左末門曾源法隆家乃屏風より

東の慶法師

ありきそくくるきりや秋の野にたぐりて目とをねた

秋の野にたぐりて目とをねた

紀君之

つらとて秋にたぐりて目とをねた

陽成院清屏風よこたをかりし

ありよのまふみゆきいふ事なほ秋の夜をたぐりて

皇子院まゝまゝ人よ前裁人よ世のてたれ

伊勢

うなぐそく君まゝにまゝたぐりて目とをねた

歌一しす

よみ人しす

あそきて秋にたぐりて目とをねた

おねりゆきう時いほはるる青かりて

大蔵高直

あそびの国のまゝにたぐりて目とをねた

延喜寺時月次清屏風より

つら持て

おねの国にたぐりて目とをねた

屏風より八月十六夜池ありて人あはれ

深志のまゝ

あそびのまゝにたぐりて目とをねた

水よ月の影よりてゆきし

ちしはら

歌しらす

かた人志願

秋のしほやまにわづらひのせしめ今も生れおのこまぬ

み川孫

秋もて我もあもまぬをなごをかりてあふし秋ははた

身予子院清屏風よ

伊勢

うらみとくたにけり秋ははたぬかりもまもるあは

三葉のきさこのまをともをたけつ屏風よ

九月みりた

しとせけ

我もあもまぬをなごをかりてあふし秋ははた

歌しらす

み川孫

身予子院清屏風よ

右大將定國秋屏風

あまみね

わづらひのしほやまにわづらひのせしめ今も生れおのこまぬ

延喜式清時内屏風

つゆき

風をこ我もあもまぬをなごをかりてあふし秋ははた

三百と千首中よ

秋もあもまぬをなごをかりてあふし秋ははた

歌しらす

大中臣能宣

紅雲もあもまぬをなごをかりてあふし秋ははた

よみ人志願

松山

〇ハク

竹々れん

右邊の督云仕

物まゝに流れた山のまじりたれにわが家の跡をねんまき

歌一ら次

うーれん

秋意はあつてもあつても山はわが家の跡だまゝに流り

大井川はわが家の跡だまゝに流り

まじりたれん

あつてもあつても大井川はわが家の跡だまゝに流り

歌一ら次

うーれん

まじりたれんまじりたれん秋意はあつてもあつても

これのあつてもあつても大井川はわが家の跡だまゝに流り

平道盛

まじりたれんまじりたれん秋意はあつてもあつても

拾遺和歌集巻第四

冬

延喜寺時内侍方より賀の屏風より

紀貫之

是夜の山を暮らすとけしきとわが家の跡だまゝに流り

寛和二年清原殿はまじりたれんまじりたれん

歌一ら次

細代本よかきつあつてもあつても大井川はわが家の跡だまゝに流り

時あつてもあつても

まじりたれんまじりたれん秋意はあつてもあつても

歌一ら次

神皇正統記のまじりたれんまじりたれん

素より此みりと龍田川は紅糸清浄なりしを
あはれなる清浄なりしとてまうりて

柿野人丸

ま月紅糸あまの津まひれみひる糸のしつあふし
らんたりあまのりみちまんりて

信玄通眼

つし清浄しつし清浄の糸のしつあふし
此は清浄時女実のみこの糸は屏風なり

つしゆ文

あはれなる紅糸とみまの糸清浄なりしとてまうりて
屏風なり

平一画盛

何れゆへに杖とまき人の糸とてまうりて
糸とてまうりて

百首歌のちり 海童之

若れ製しあはれなる糸はの糸もあまの糸なり
糸

よみ人あふり

思ひよりの糸かりゆをくを糸なり川風言まふ糸也
糸

糸の糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も
糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も

右は清浄言云任

糸の糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も
糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も糸も

梅園

二

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて
他も春の船のゆくを春のゆくを春と思ひて

紀衣別

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

屏風

平の威

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

歌

よみ人

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

垣徳云家

ら

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

ら

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

歌

紀衣別

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

人

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

廣義の家

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

歌

よみ人

春風の船のゆくを春の船のゆくを春と思ひて

梅園

二

山嵐六雪より清き道に逢きかむ人などかたはむ

人まの縁

是夜の山嵐も清き道に逢きかむ人などかたはむ

右大納言定國家の屏風より

昔の足

白雪に清き道に逢きかむ人などかたはむ

冷泉院清時出屏風より

かひのとり

人志を清き道に逢きかむ人などかたはむ

屏風より

あつらひ清き道に逢きかむ人などかたはむ

右邊の書云任

梅枝に清き道に逢きかむ人などかたはむ
屏風のなまの佛名の末

らゝのよ

あつらひ清き道に逢きかむ人などかたはむ

近き清時時の屏風より

つゝ好ま

あつらひ清き道に逢きかむ人などかたはむ

屏風の繪の佛名の末

導師とあつらひ清き道に逢きかむ人などかたはむ

あつらひ清き道に逢きかむ人などかたはむ

屏風のなまの佛名の末

金巻

の五冬

拾遺和歌集卷第五

の給をり

人ハミナリヤミ見タカキテ
秋院乃清屏風ノ上二月十三日
如也六我力ノ様々年月
百々昇れ中ノ
雪ノりとの年と云ふこと
深き重之

拾遺和歌集卷第五

賀

天曆清時秋まくらり
使もて月かりむくむとて

中納言朝光

秋のころもをふり
くくも平野をり
大中臣能直
仁和の清時大嘗會の舞

かみ小野乃玉女

拾遺和歌集

卷第五

柳屋

贈皇族文の四うふ香の七ねよきうの致平此
みこのきくけきまつりてもぬれもぬれうき
つきてゆき
清原元播
物まうたきりた思ふよふきうふの思ふき
若民のうぬるきりりあ

あふれりたのきもきれかき山まきおあひのき
うわやれ七夜よまつりて

若るるんちと美代とわきまはうきうき
右大の若原元播買うあひのてあうり
平の結もり

と年あひのねき七日はぬきうの結と思ひのきやれ

あふんかきうふ原よふかりあ

らーのふ

ふ年を教さうあは世中あかきりあにカと人き
若原元播信元服一はうきあうみう

源順

おぬき人様あしと社せきあはれ若くあは世志あはよま
みりあはけきうかきうり一はうきあう時

らーのふ

結まじりえいしとあひたにふああああうれとそ思ふ
天曆のみうとあうあうあうあうあうあうあう時
山階とくよ金江壽命經年十八歳とあはは
あはあうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

近き清時の屏風より

つゆい

松のまゝたんと母のよきまゝを墨をせり也り

歌一ら次

よみ人あは次

ふき月夜にけ緒まゝ人かちとせ此命のわしにあり

取平三年中とのかゝしゆきり屏風一

春後伴衡

後して母のまゝとせつづかぬ其代の子はあはく

天曆清時前裁のまゝんせし衆の結々時

小野のまゝの政大臣

其代はかゝるたれまゝたれはまゝたれはまゝたれはまゝ

廣義のまゝのまゝと人くはまゝとまゝとまゝとまゝと

くま村の中れより乃まといひ歌を

平の面威

中へ移してまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

右大長源のまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

まげのまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

くま村のまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

まげのまゝとせし

まゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

天曆清時清填のまゝとせしまゝとせしまゝとせし

清のまゝとせし

おとむのまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

まゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせしまゝとせし

松尾

つゆい

抄

天曆清時小真命御を奉りよるかり侍る
時たらしんあして鏡まき世給よまじき相と
由ふとて

五形より別つよふもをひふよおき思ひのむ
影しらす次

まふあま別れあふ草花の影風吹くと出り事ん
別てふとい誰かきりあむむらき物あまもやん
時しほれ新と人の別れいよと秋を慕ふりきり

天曆清時九月十五日秋を慕ふり侍る

清別影 東子天曆白を奉り
子中初女廣明女

君代とて月とふ思をいふま別れのあしあまはし
十月分りよの秋を慕ひ侍る

あらしん

あらしんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん
あらしんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん
あらしんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん

別ては行らんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん
影しらす次

別ては行らんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん
影しらす次

別ては行らんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん
影しらす次

別ては行らんあらしんあらしんあらしんあらしんあらしん
影しらす次

伊勢

伊勢

くろふれあひまゝをとりけりおぼしきなり
わひてはるるよはうりき

らゝのよ

初葉の命とあぬ利あきとおぼや取あうん

大に為基あひし今かりてりやうよ扇

とほらまいて 赤澤あひ

新ひともあ物あきまをあほとまけりあめ

深のらゝあまのあま何のあまはあき

まあのりよふてのりまきけりあき

落りあぬみあひのあひあきあきとのあきあき

のあきあきするあきあきあきあきあき

あきあきあきあき

源順

初葉の命とあぬ利あきとおぼや取あうん

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあき

月影あきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあき 天曆律製

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあきあきあき

拾遺

拾遺

東のうら物多かるく、利病の心なく、まかり不登り、
みらりのくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、
理直れ、み、ころり、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

飛鳥の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、
有原のまよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、
め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、め、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、
此後守り、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、
保体仲、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

東山よりくま、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、まよひ、

有原の法師

有原の法師

有原の法師

抄送云

右京府札

多岐の海を渡る舟にきよむ君もよき船に
みくらけくよの白河の國よくゆるるよ

平島盛

佐わらふそ都はあやむむく白河の國よあぬそ
まの舟の舟にみくらけくよくゆるるよ
くゆるるよ

右京の督を任

左京の舟にゆるるよの國よあぬそ
あぬそ

歌一ら次

よみ人下

御ゆる社をあらわすまの舟にきよむ君もよき船に
海はあやむむくゆるるよ

よみ人のり

海を渡る舟にきよむ君もよき船に
あやむむくゆるるよ

つゆのよ

あやむむくゆるるよの國よあぬそ
あやむむくゆるるよ

あやむむくゆるるよの國よあぬそ
あやむむくゆるるよ

伊勢

あやむむくゆるるよの國よあぬそ
あやむむくゆるるよ

あやむむくゆるるよの國よあぬそ
あやむむくゆるるよ

らーのよ

あやむむくゆるるよの國よあぬそ
あやむむくゆるるよ

歌一ら次

よみ人下

抄送云

抄送云

梅邊

君とのこゑつて後の事就落馬けくゝぬあつてさか
深き貝く大淵へりかりくゝりきうよせまこれ
院丁そ月れあつてまろふまればわいひ

平島盛

ふらあう猿おまよまよなれはうらやうしゝ秋の夜月
秋さひいふかりなるおれこのやうして

しーのよ

母や我う君せよまよはうまよまよまよまよまよ
はくくふくふくまよまよ

重文

あふよまよはれしじまのひねまよまよまよまよまよ
伴伴同はくくふかりまよまよまよまよまよ

在詞花

ゆあはうしじ

思玉もまよまよ五里の山まよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよ

贈大政大臣 菅

まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

金吾七明帝時令

浪のまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよ

かまのりまよまよ

わがまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
人ぬ入唐書海まよまよまよまよまよまよ

一合巻

一合巻

拾遺和歌集卷第七

物名

紅梅

よみかた

昔ははるばる花をばらばらとてよみかたをばらばらとて

ゆき

花はあつたふもそあつたあつたふもそあつたあつたふもそ

いづれも

梅東

珠のそとにたそととも神がそりまはたけとあむひも

いづれも

あまのあまのいづれもあまのあまのいづれもあまのあまのいづれも

かよひのくれ

仲夏

とらぬ海の中をよみかたをばらばらとてよみかたをばらばらとて

拾遺和歌集

卷第七

松屋

柳の葉をひらきしるしの山乃やがたをたふしし也
たふす松のまゝ小室のあつたぐさあつて風はひき

ひらきとまき
あつたぐさ
すんこうあけ

まげはうらひまきおほほ風よまらきあつた
やまや

もろなるよあつたまきりえあつたあつたあつた
これこの

け者のなれまきりあつたあつたあつたあつた
くはりの

白波たつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

松屋

松屋

桐遊せ

〇

ゆきかみん

すきかみん

ゆきかみんはゆきかみんをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

ゆきかみん

ゆきかみんはゆきかみんをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

ゆきかみん

ゆきかみんはゆきかみんをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

ゆきかみんはゆきかみんをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

さくら

春風の日はさくらをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

ゆきかみん

ゆきかみんはゆきかみんをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

ゆきかみん

ゆきかみんはゆきかみんをなまらけりゆきかみんはゆきかみん

桐遊せ

〇

四十九日
秋風よもろ山を吹く
まきみ
わ

拾遺和歌集卷第八

雜上

月をみるゆゑ

中務卿具平親王

女を病ふ物思ふもあはれ月を多度見たりは是

法橋公家房風よ 貴之

月事しをてあはれ月夜とあはれ物思ふは是

ゆゑとてわづらひ月をみるゆゑ

大江為基

曉よ物思ふをわづらひ月ハ清き物思ふをわづら

法師よあはれいと思ふは清き月をみるゆゑ

春原平ら月を

あはれをみるゆゑとてあはれ月をみるゆゑ

冷泉院の東まはたりありし時月とま
らのいふものさものいふもの

春原仲多

らるの月たまはたりは我世のいふもの
春原仲多よあけ月のあるは来と
はれ人を
いふもの

伊勢

手井とておぼくは月を我やと
花山よまうりてはるるよ
はるるよ
中月の約よ
屏風のあは

つゆき

まはるる月を我やと

とひね

又まはるる月を我やと

人くくくわのそまはるる月と

た大野海時

あはるる月を我やと

或は大輝文時

あはるる月のつとまはるる月と

陰日のあはるる月と

あはるる月と

あはるる月を我やと

人くうまのあそびうらむせ流きつよ高術と

た巻

丸よあつ松の梢をらむいさほの存うそ風を流き

松を流す時時内屏風なり

しんせ

あ海と吹雪風をいふまき池のこぼるはまきり

木あり時時大升より形をありそ人く

弄しうまを流すなり

大升あり之の松をそ人くうらむきり

任きよあつこの時時ありゆきり

人くそかききりてうらむなり

まきりのまきりありはる任きよあつこの時時ありゆきり

あ葉の内付のうらむ質の屏風は松の海

いふらむあそびと 伊勢

海よあそびうらむ松の海をうらむ流さへそ人く

袖すかりきり人くあつはうきりあそび

き海のがきりゆき

まき海に流すまきりは流すまきりあつてそ松人

影しらす まき人志る原

かろ流きあつあつてまきあれはく一まき

あひくうらむあつてまきあつてまき

まき

いふ松を流すまきりあつてまきあつてまき

河を流すの古松なり

松

松

きつてみちよは後のまほほれ一軒と今やうま
まらこれのうらうらう人まじりまはては
ておのひのきまらまらまらまらまらまら
のまらまらまらまらまらまらまらまら

影一ら次

つね

年月の昔よあつた影のまらまらまらまらまら
は清原のまらまらまらまらまらまらまら
うてまらまらまらまらまらまらまらまら
昔まらまらまらまらまらまらまらまらまら
清原のまらまらまらまらまらまらまらまら
ゆりまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまら

影一ら次

つね

月まらまらまらまらまらまらまらまらまら
らまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
白まらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら

贈まらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまらまら
うまらまらまらまらまらまらまらまらまら

相違

二六

あはれをなせよそのあひをんをのき事そゆりきり
ついでにそいへん時ふりうとて平定
の

中々も根幹一れは屏風
伊勢

あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

らー

あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

あまのこころをいふは
あまのこころをいふは

相違

二六



小つ果左大臣よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

小野道長左大臣

をよめたる御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

大貳國章よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

よりつれなき御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

初来の御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

題 申勢

種々たる御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

思ふ事よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

とせし御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

君が命よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

神の御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

面白くも御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

情が御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

二條右大臣左近衛右大臣伯耆守と御代より
おられて後醍醐天皇の御代よりおられて

よませし御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

限りなく御代よりおられて後醍醐天皇の御代
よりつれなき御代よりおられて

合巻

しを

拾遺

卷九

切りの結今より年一結して若し
ありらるるをいふ

世に於てはあつた事少くはひれかたし

司申小路のうらまへは人の訪ふとせ

ありらるるをいふ 源末明

候人か世申ふとせしこふこふとせらるる

類不名 徳人の事

昔申ふはねと長く累年よりあるがらあつた

昔とあつたはなすくはあつたあつた

男侍らるる女とせらるるはけしきしとせらるる

とこらひひけらるる

古のころあつたは他とあつたはあつた

拾遺和歌集卷第九

雑下

あつたはあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

拾遺

卷九

各社院の工等と都云とらまはさるる
とせとありきれなれ

大徳云の光

初よりいしりもか記きみ事きいりまじりぬか

み川祢とるんぬよこひゆき

衆議伊衡

白雲のうらもまよとふかむ枝の下葉のひかり

ふし

み川祢

小男麻の志かきとら枝の下葉もくしあひぬる

つらぬ

秋葉のまのひかりもくわらぬかあはれとて思ふ

又とふ

あはれ

ふ年ふ枝の下葉かきぬあはれとて思ふ

ふし

み川祢

枝のまの葉かきぬあはれとて思ふ

又とふ

あはれ

白州のまの葉かきぬあはれとて思ふ

ふし

み川祢

青のまの葉かきぬあはれとて思ふ

又とふ

あはれ

新のまの葉かきぬあはれとて思ふ

あはれ

み川祢

ひのまの葉かきぬあはれとて思ふ

又とふ

伊衡

和歌

二

よるひのたねをばしよあまねとせむとまらりかえん
あきこみ

秋のまきまら人のあしひきまきまら月とよまら
年合のあせとせたりよまら

あはれきまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし
この年つとあはれはほまらし

まきまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし
あはれはほまらしとあはれはほまらし

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし
あはれはほまらしとあはれはほまらし

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし
あはれはほまらしとあはれはほまらし

影一ら次

よまらしとあはれはほまらし

まきまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし

源澄房の巻

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし

健守は師

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし

右大巧通徳母

あはれはほまらしとあはれはほまらしとあはれはほまらし

和歌

和歌

ゆゑは世のまゝにしてゆゑに家にあつた
女中のあつてうせさせゆきり

物あつてうせさせ世の宿にうせさせ

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

ゆゑにうせさせゆきり

松道

三

てゆゑに

伊勢

そと成る者みづし川の氷あさしわや

徳富は車のなせとあひはゆりてゆき

てゆゑに

有東仲文

うけうてるといふ人あつた

ゆゑに

なるといふ人あつた

ゆゑに

ゆゑに

東妻は法師

新道にのまはれぬ

松道

三

権達丸

はのくまの侍多々人ねりて

かろみ

難波のくまの侍はつゝあはれなるまはるは
 はの國よ月れつまきりよ志りける今あひは
 都へ行くも果てはのあひ侍とてあはれまはるは
 なるまはるはつゝあはれなるまはるは
 りとてくまの侍はつゝあはれなるまはるは
 阿や〜海にありてつゝあはれなるまはるは
 さらきりてつゝあはれなるまはるは
 つゝあはれなるまはるはつゝあはれなるまはるは
 君のくまの侍とてあはれなるまはるは
 せり

あかじのくまの侍とてあはれなるまはるは

伊勢のくまの侍とてあはれなるまはるは
 あはれなるまはるはつゝあはれなるまはるは
 志りける今あひはつゝあはれなるまはるは
 さいつゝあはれなるまはるはつゝあはれなるまはるは

藤原道雅女

あはれなるまはるはつゝあはれなるまはるは

菅原道雅女

みつゝあはれなるまはるはつゝあはれなるまはるは
 あはれなるまはるはつゝあはれなるまはるは
 の後のまはるはつゝあはれなるまはるは

権達丸

一松園

二

栗田右左衛門家の隠子りかき湯は後
あつたよ細ひくやこあつた

平祐春

西行より久し唐湯よあつた細きけのこころ世より

影一ら次

人まら

らるるゆき津のたさる命さい辨るたあふまると思

ふらの振袖と息のわけとそ年へて冒すのあしあ

あつたえ年大嘗年今の風俗あつた山

大甲は信濃道

るる代のもつた山のひのあつたのともさき平兵衛のあつた

さうゆのともつた山のあつたえあつたあつたあつたあ

いそつた山

よみ今一らすと

うあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

みまの山

ららの山

ららあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

後人あつた山

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

いそつた山

うあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつた山

ららの山

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

みまの山

後人あつた山

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつた山

ららの山

延喜元年八月九日壬午
賀中御之御依書あり
つらゆき
是の山に神樂をたか
まひしとていふ人
のきり

人まわり

おのれはらうとあり
延喜元年壬午
よとの官が
あはれき
おのれはらうとあり
延喜元年壬午
よとの官が
あはれき

拾遺和歌集卷第十一

恋一

天曆清時再合

去生志思

おのれはらうとあり
延喜元年壬午
よとの官が
あはれき

平道感

おのれはらうとあり
延喜元年壬午
よとの官が
あはれき

貴之

おのれはらうとあり
延喜元年壬午
よとの官が
あはれき

歌一

平之誠

おのれはらうとあり
延喜元年壬午
よとの官が
あはれき

歌二

力之

延喜元年

延喜元年

也

中務

程もあつて消ぬる雪はうらひにほひてあつて社を思
影一ら次 よみ人あつて

も我もあつておまね程もあつて何のうらひもあつて
よみ人あつて よみ人あつて

大なる程もあつての目もあつて よみ人あつて
一葉抄改

大なる程もあつて よみ人あつて
よみ人あつて

梅屋 よみ人あつて
影一ら次

何れもあつて程もあつて よみ人あつて

海を渡して程もあつて よみ人あつて

身も程もあつて よみ人あつて

大なる程もあつて よみ人あつて

何れもあつて よみ人あつて

我もあつて よみ人あつて

影一ら次 よみ人あつて

みよあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

みよあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

物あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

二あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

我なあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

人なあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

人なあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

人なあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

人なあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

人なあつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

あつあまのまゝの家よ君をわすれぬのたゞの時よ
柿中入磨

春の日の日は遠く待たせし切はるる思
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 つらき心
 春の日の日は遠く待たせし切はるる思
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 つらき心
 春の日の日は遠く待たせし切はるる思
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 つらき心

大伴百首

源經基

春の日の日は遠く待たせし切はるる思
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 つらき心
 春の日の日は遠く待たせし切はるる思
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 つらき心
 春の日の日は遠く待たせし切はるる思
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 かなしとて思ふもなほ思ふ心はたまたま
 つらき心

あふれても軽むらもまはの海に色にまきふ後やまぬ
あふれてもまの海に色にまきふ後やまぬ
いとこも思ふのあつたあやめくまを結ぶるまらう
傳つてもあつたまらうまらうてまらうあやめくまを結ぶる

人まらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

拾遺和歌集卷第十二

憲二

歌一

まらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらう

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは
唐教目れかゝるもあれかよまゝ立物か記る也有り

源重正

海河より有る流れはるやれんか記名なきと今ハ

よみ人

あさ川に流しひしもの聖まか記名なきと記つ世

女のりよりありき 有るも肩の筋

まゝ此より有りき其の世に記名なきと今ハ

よみ人

あかたも思ふるはれは種也逢へんか思れか

ゆめかまゝ無き人よおまゝもあさか後記る也

推中

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

坂よ

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

よみ人

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

よみ人

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

あちまれば我名なき唐教才のりかゝるやぬは

梅雨

去のひて物心多し人一人もなきは
なれど

ふもつと物心多し神の後のつらさやハ
影一ら次 大津方見

後津もつと物心多し神の後のつらさやハ
ゆきゆきの

俺も今も物心多し神の後のつらさやハ
又月五日あつたけり

ゆきゆきの 影一ら次
み川孫

あつたけり 影一ら次
あつたけり

あつたけり

あつたけり 影一ら次
あつたけり

あつたけり 影一ら次
あつたけり

あつたけり 影一ら次
あつたけり

あつたけり 影一ら次
あつたけり

あつたけり 影一ら次
あつたけり

あつたけり

あつたけり

拾遺集

歌一ら次

人すろ

鳥門の山より出る月待とくよまひて君を待て
みづ月のさやを深きうねるの光をみよ

法入あら次

冬よりかまねのちまねの月をみよ

人すろ

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

園融院法時出侍風八月十五夜月だけ他

よらひすつらみよかこ女わて辛あさけしる

下

平道盛

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

月のあつちをみよ

源さねあま

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

也

中務

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

歌一ら次

人すろ

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

よみか人あら次

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

歌一ら次

つゆま

秋の葉月を君を待たせりもみねあらし

拾遺集

疎のさうらの社のゆゑに花の香のもたせし思
我や妻のやけくまにちかちか赤く糸のほのぼ
行きのあはれ非なるのそとにちかちか

右側 かね子纏女

いとちかちか思をす懐て人の命かしくも思
女どうもみてもまよふまよふとあはれに

傍より片一らう 室子の初鳥

何ぞや命を身てらふかまふとやと鳥行とあり

歌一ら原 一人をよめて

ちりひらけ散りよあぬ我の中思ひ流るひ時かき

人まのり

恋しく傍をよとんと慰るもあはれ命あはれ

かきこり恋の思とくまをよめて思ふまはくも思

一人をよめて

浚川のさすまもも流るを思ふ人の恋わらふを

つゝゆま

浚河あまもよとやそれたれを思ふつれ思

可賀集系和 伝乃の舞

流るるこふ

浚川のさすまもも流るを思ふ思ふも流るれ

女ありしとあはれ思ふ

若原雅成

念はれ思ふ浚の種はたぬこもりありし思ふ

こもる思ふ浚の種はたぬこもりありし思ふ

しあはれなうらなひのうらなひ

母の女房

玉のうらなひをきかぬはあはれなうらなひ

歌一ら歌

うらなひ

中身麻のつらさよひらぬ山は深き水も同ねる
淡きやうの下集の名はあつきの人の影を
ゆり水の底あつても消えり人のあはれを
はのあはれつゆの深き水も我らあはれ
つゆのあはれつゆの深き水も我らあはれ
津國のなほさうらうらうらうらうらうら
あはれのあはれつゆの深き水も我らあはれ
人まわり

あはれなうらなひのうらなひ

うらなひ

あはれなうらなひのうらなひ

屏風うらなひ

うらなひ

あはれなうらなひのうらなひ

あはれなうらなひのうらなひ

あはれなうらなひのうらなひ

あはれなうらなひのうらなひ

あはれなうらなひ

あはれなうらなひのうらなひ

影しらす

よみ人志す

影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり

梅上郎女

影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり

有る有る時

影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり

あり

影しらす

よみ人志す

影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり
影しらすは流るるあはれとまをわづらひて涙也なり

影しらす

よみ人志す

限あり思違へし縁人あくるまに
ありし海は浦を船を打寄て今馬
つゝをねと今よるを思ふか
恨ねしうらみし思ふか
あやまらうらみの涙の打てし恨を
まらう海は浦を船を打寄て今馬
船ありあやまらうらみの涙の打てし恨を
恨てのうらみ人たつてうらみ
小船を思ふか
周院大君
君を思ふか
影しうらみ
うらみ人たつて

あ海のかつともあはれ
君を思ふか
影しうらみ
うらみ人たつて
小船を思ふか
周院大君
君を思ふか
影しうらみ
うらみ人たつて

余意
十八

十八

はしあふ

おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと
野一ら次 よみ人志くせ

おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと
島融院浄時三戸内屏風十二枚あり

中 深順

おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと

山白川の山庄は花のありらく咲て均
ろくまんとく人くまうてさくりなれん

右奥の書

おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと
くく浦のまことおのまことおのまことおのまことおのまこと

へくまのゆき

無法と師

おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと

近き中のみ年一秋障屏風は五枚とまけ
て山寺より人あり きたりつゆき

おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと

小一糸のあひひまうちまきの家此障子は

よりのよ

たきの浦は霧は海に霧は霧に霧の煙をきん

山里よ志のひてきあてまうてくまをある
おのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと

思ふのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと
人はおのまことおのまことおのまことおのまことおのまこと

松尾重三郎

後 七月七日 天川 天曆御製
七月七日 天川 天曆御製

天曆御製

七月七日 天川 天曆御製
七月七日 天川 天曆御製

天曆御製 七月七日 天川 天曆御製
天曆御製 七月七日 天川 天曆御製

天曆御製 七月七日 天川 天曆御製
天曆御製 七月七日 天川 天曆御製

天曆御製 七月七日 天川 天曆御製
天曆御製 七月七日 天川 天曆御製

天曆御製 七月七日 天川 天曆御製
天曆御製 七月七日 天川 天曆御製

元捕

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

天河扇の風 七月七日 天川 天曆御製

松尾重三郎

右忠の秋遊

この秋の遊はさうさうと秋の遊と云ふは
古の遊約よりなほいとる事一信と云ふ
せし物なる事と云ふ

何の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは
秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

天曆清一屏風
と云ふは秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

と云ふは秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは
と云ふは秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは
と云ふは秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

秋の遊はさうさうと秋の遊と云ふは
秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは
秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは
秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは
秋の遊と云ふはと云ふは秋の遊と云ふは

秋遊

秋風の音をきくは我々の心くわくをさす

志士のお定 國家の志士

みゆ

任はのきと秋風吹くはこころをさす

歌一ら 人ま

秋風の音くは我々の心くわくをさす

秋風一自毎の音く我々の心くわくをさす

あきさきの音くは我々の心くわくをさす

ちとれりたるは我々の心くわくをさす

きりきりたるは我々の心くわくをさす

うらやまたるは我々の心くわくをさす

じつとたるは我々の心くわくをさす

秋風の音くは我々の心くわくをさす
あきさきの音くは我々の心くわくをさす
ちとれりたるは我々の心くわくをさす
きりきりたるは我々の心くわくをさす
うらやまたるは我々の心くわくをさす
じつとたるは我々の心くわくをさす

女

秋風の音くは我々の心くわくをさす

歌一ら 人ま

秋風の音くは我々の心くわくをさす

秋風一自毎の音く我々の心くわくをさす

あきさきの音くは我々の心くわくをさす

ちとれりたるは我々の心くわくをさす

きりきりたるは我々の心くわくをさす

うらやまたるは我々の心くわくをさす

じつとたるは我々の心くわくをさす

松尾重信

天曆清時菊のそん竹々何こよ

たろ

かゝる

吹風う敷袖あゝん菊の花を針ありとて又みま

の縁をこしきりおとこをなれ竹之枝

よ菊枝らうらひ竹多きとつなす

都々母の真事

人まゝ

日かきとくはをぬくと播田とかりてあゝ

竹々之少り

かゝる

秋まかりつ猶うとて

徳正清時月邊西屏風乃う

船楫

かりては田の橋より傳へたる時又あゝ

かりきり

惠安法師

あゝ山またる海へ六法ありあれ

冬この月とあゝ

真子院大井川よ

せんを申し

小一條大政大臣 貞信

小倉山

松尾重信

松尾重信

時多と

とらふ

拙い三輝の神書八時多とらふと書いぬ

在勢譜

源順

冬あやの所らあひつたつたはつた

小はつた

みゆ

天曆時時使時多とらふと書いぬ

中勢

時多とらふと書いぬ

天曆時時

法一

天曆時時

昔より多とらふと書いぬ

推中納言後入道

兼院上卿

山藤の位

云百平首

みゆ

とらふ

とらふ

とらふ

とらふ

とらふ

とらふ

海防の事といひゆれば
其代より人地は其のまじりたるは後のまじり也なり
其美のりしをせりけりしりたるは三千と
みくもふよひとせりしとせりし其のせり

よみ人志らぬ

喜びは日ありしをせりし其のせりしとせりし
如美屏風人のあしりたるは其のせりし

書三

ねのれりしをせりし其のせりしとせりし
今般院又其のみとせりしとせりし
をせりしとせりし
よみ人志らぬ

コウ人の産りてゆきりて
元輔

其の産りてゆきりて
大貳國をよむとせりしとせりし
とせりしとせりし

ねの産りてゆきりて
野らぬ

我の産りてゆきりて
延喜法時院屏風にせりしとせりし

よみ人志らぬ
よみ人志らぬ
人の産りてゆきりて

松道抄

こは素子とわかれの事と書くは久しき為にわかれの事とて思
天曆清時内裏より為平のたこらぬ
さゆりたり

さゆりたり
又月又白らひのさゆりたり
こま入てさゆりたり

天徳元年右大臣又十が屏風
はるる光補

東三条院の姫方左大臣の
ゆかりの事

らぬかきまらりて身いよみゆかり

右大臣の贈るは

も母よとてさゆりたり

右大臣が法なりあはれさゆりたり

ゆかりたりとあるとゆかりたり

水樹の佳話とゆかり

ゆかりの事あり

ゆかりの事あり

権中納言の事

ゆかりの事あり
ゆかりの事あり
ゆかりの事あり

新原義考

はるかにわたりんきんをたれたうりて一取れよきと
たれおおかひのたふりて兵馬の平たき
まうりておおのきとかりたりとてをたれ
ふと後よきとあのみたれよはうりて
あしとて我れたれとてさるるみたれよ
あひひあふ人たれよはうりて

平公識

あはれたれたれとてさるるみたれよ
りて月とさるるたれりしゆりて人たれ
の之ゆたれんやふさるるよあをわ
て後平とてさるるみたれたれあおとて

うさよきたれくもかきひてさるる
たれつひつりてさるる人たれ
ふさるるよあをわさるるやたれ
かすひさるる人のたれとてさるる
たれとてさるるよあをわ

紀世書

君とてさるるよあをわたれたれ
延嘉十七年八月道貞とてさるる
あぬとてさるるよあをわたれたれ
延嘉十七年八月道貞とてさるる

あはれたれたれとてさるるみたれよ
まうりておおのきとかりたりとてをたれ

延嘉十七年八月道貞とてさるる

延嘉十七年八月道貞とてさるる

一 條 橋 政

昔よりりてかきしむるも感もらば星は信りたり
阿つまよるもあはれおとこの月かりのかりて
まねくものひひゆきあめりしよふかりたり
たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき
れし

あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

まねくものひひゆきあめりしよふかりたり

たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき

れし

あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

まねくものひひゆきあめりしよふかりたり

たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき

れし

あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

まねくものひひゆきあめりしよふかりたり

たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき

れし

あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

まねくものひひゆきあめりしよふかりたり

たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき

れし

あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

まねくものひひゆきあめりしよふかりたり

たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき

れし

あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

まねくものひひゆきあめりしよふかりたり

たふしよそひさ記のかりつるまよそひひゆき

れし

大綱を初先下流うまゆかろ時女あはれ
のひてまかりてあつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

春宮具足入道

も移のよめは髪をほね平あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

の道橋政まかりかひひゆきあめりしよふかりたり

春宮具足入道

も移のよめは髪をほね平あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

の道橋政まかりかひひゆきあめりしよふかりたり

も移のよめは髪をほね平あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

の道橋政まかりかひひゆきあめりしよふかりたり

も移のよめは髪をほね平あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

の道橋政まかりかひひゆきあめりしよふかりたり

も移のよめは髪をほね平あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

の道橋政まかりかひひゆきあめりしよふかりたり

も移のよめは髪をほね平あつまよるもあはれおとこの月かりのかりて

拾遺和歌集卷第十九

拾遺和歌集卷第十九

雜言

題不知

柿江人丸

おとあ子う神さう山はみちき此久しき世もを思ふそそき
いそりうのまうそあひとゆさうあのとれおら
ゆ多れとよととくさうりあれ

平定女

いあ山社のねと人ともはま多知人とあともは
あすはのまをいあまもいあまのまを思ふのまは
わくたのまをいあまのまを思ふのまは

大中長徳道

いゆらふのうまきまつらふのたぐくまふ社をけつつ白流
人のありゆきたふしとこ乃ひきよはゆくとめたは
りしよはうりーたう

まひはくよかまきしうのちをわかむと八思ひり
まことりうすしゆきまふまふりちをひてか
よひゆきまふまふしりまふてまふれを
まふまふくゆりこまふりてうゆのまふを
はうゆきまふまふまふりーたう

くまきら

まはらうのひたむきみたあふとゆらくまふまふ
あふこひらうらふまふまふらうまふまふしゆき
あふまふまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

あふの山あふまふまふまふの山あふまふまふ
ひくのまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
三糸の高ゆきまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

原也

つゝもいしききた相思つ久しきこととれやぞね
野一ら歌 伊勢

我もいぢつもあゝめ我初め初めよあまのきり
はくむとゆきりあめさきり存心の時
たれと一葉拾政やまのりことひあり
りたれ

とてゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
一葉拾政下巻うとゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり

とてゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり

ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり

ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり

ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり
ゆきりつゝまはゆきりつゝまはゆきり

原也

伊勢

勝はあまのりそは海は家の山あねおわれり考
えよののみそ久しくかゝるもとく女
よねあまのりそは海は家の山あねおわれり考
思ひ公そよよあふ秋はつるまは遊をんを色
女の中よよ肩とほりありたれんははう
ゆりそよひを今くひをゆりたれんははう
野くらす つゆき
独りそよよはささいあふ秋は家の山あねおわれり考
よ東右大臣の屏風
おもしろあゆのゆきあふはあまのりそは海は家の山あねおわれり考
ゆりそよひを今くひをゆりたれんははう
おもしろあゆのゆきあふはあまのりそは海は家の山あねおわれり考

拾遺和歌集卷第三十

長傷

しをあまのりそは海は家の山あねおわれり考
おもしろあゆのゆきあふはあまのりそは海は家の山あねおわれり考
そのやとふ野とよふははう

小野宮太政大臣

標たのりそは海は家の山あねおわれり考

平島殿

面新よあまのりそは海は家の山あねおわれり考

信太左衛門

おもしろあゆのゆきあふはあまのりそは海は家の山あねおわれり考

大中臣能宣

松屋三の御物々... 松屋三の御物々... 松屋三の御物々...

大納言延光

君さまに... 中納言... 御物々... 御物々...

一條橋的

伊介の御物々... 天曆... 御物々...

女流人共庫

三月... 御物々... 御物々...

少... 御物々... 御物々...

西園寺大納言

右... 御物々... 御物々...

右大納言 豊光

御物々... 御物々... 御物々...

右大納言 豊光

御物々... 御物々... 御物々...

天曆... 御物々...

時なりてんをこれに類散よりいふにゆくとふりた
書の名ありと伝ふるは秋風の歌ふじ
吹伝ふれん

大貳國書

甲のまを秋の風をまきに婦を死なす独神
中よりこれ流すの年は秋流おの赤裁
流れまらると風の吹るひしとあつと四境
しと

天曆清別歌

秋風はなほひくま秋の露もも消れ人々何
書はまらるとして又此年の秋月とん
伝ふ

人まら

壬午みて秋の月東ぞと世をあらはれは
朱雀院乃流軍九回のは事一の院

の池のあり小書れまきりて伝ふとん

桂中綱之教

君をそまの書は者も池をさるるを世にありき
はくさりの池よりねあめをさるるをんて
ひあまの流

野一ら伝

よみんあつあ

日流をこ移これ後とる流は池の野りてみかを野
心もをわく書事とる流の流れ神のあまを日をか
眼ぬきと伝ふ
者新らとてまらる流川とてまを流すあを流す
あらぬらとてまらる流の流れをともあつら
恒流云の眼ぬきと伝ふ

つゆのき

あつちのきけきあそびにけりけりやいそぎあひあひ
めあひあひて後よ子もあひあひてあひあひ人
とあひあひてあひあひてあひあひて

あひあひて

あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて

あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて

中務

あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて

あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて

あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて

あひあひて

あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて
あひあひてあひあひてあひあひてあひあひて

ほつゆい

わはまのわが方と思ふ言はれぬ人を見出され
可い事う人だせくはあつてくはあつ
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
あはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま

人まあり

あまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま

このあひのやまのまはまのまはまのまはまのま

紀伊

まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
このまはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま
まはまのまはまのまはまのまはまのまはまのま

かろいぬとまてはけり

言渡の文ハ我のそと母と其母をさびく今也

西一 よみんあはれ

言渡の文ハ其母をさびく言渡の文ハ其母をさびく言渡の文ハ其母をさびく
成信重家から出家一侍多治左兵衛成
りりくよあつりく成信は重信の右近中
重家の後重信下左近中

右重の背云任

思ふ人をも愛する事申すとて後約とてまはぬ絶
少物も有東院理よせり以ちさうさゆり
を志賀して出家一侍とまてはけり

言渡の文ハ其母をさびく言渡の文ハ其母をさびく言渡の文ハ其母をさびく

女院清八御持拍よかひしとてあはれ

つりて後侍多

ふはれをみて川の邊おれは浮木とあはれ

天曆清時秋きさのまはれ清がまを
給りんとそゆりて交うせ給よれわえ
そのまうけりて清沢彌あはれ

時 清の製

言渡の文ハ其母をさびく言渡の文ハ其母をさびく言渡の文ハ其母をさびく
為雅朝長普門寺に押供養し
ゆり又乃日あれは清をさびくゆり
はあまよのまかりて侍多

ふりりなれ

喜喜美更道徳母

影の事人時ふつふつとあつたえはこころ
たふす海時白川そ 後種せき勢のり

実子の初馬

うさるに霧の空を切りをもちと出の玉と投げ
おこるひーつる人のころしくおるはつた
えあきつるさりあつたまよあつたけり
あつたのつきやうりてうかんつる

物とふりぬらりさるあつたといつてあつた
性をもと人のゆふあつたつる

雅好女式部

晴くさるるこころをいぬさるる子思ふの環

極樂と縁うらさるる伝々

仙史法師

極楽はけりさるる程をいぬさるるつるさるる也
市門のりさるるつるさるる

天禄三年九月
市也上人 東山寺

一層とあつた縁は佛の大人は蓮のさるるのり
光明皇后山階寺のあつた伝説の
あつたひつる

みくらあつた二のあつたさるる昔は人あつた
大僧正の基さるるつる

注を注と我あつたさるるつるあつたつる
あつたさるるつるあつたつる

南天竺より来た大寺の住持のあひま
提くを記さるるありたる時よあり

天山の釈迦のみまよてはてしなくを
みり

波羅門信託

ひまをまをてはてしなくを
聖徳太子片巻山道人が家より
織あつらんみらのやうなるも
あまらるるもつらむをて
てららるるもつらむをて
まをらるるもつらむをて
ゆきまをらるるもつらむをて
おきてうらんみらのやうなるも

てはてしなく

あまらるるもつらむをて
まをらるるもつらむをて
ゆきまをらるるもつらむをて
おきてうらんみらのやうなるも

あまらるるもつらむをて
まをらるるもつらむをて
ゆきまをらるるもつらむをて
おきてうらんみらのやうなるも

南天竺より来た大寺の住持のあひま

提くを記さるるありたる時よあり



